

終助詞「よ」が持つ「失礼さ」の度合い

林 朝 子

The Degree of Impoliteness *yo* shows

HAYASHI Asako

〈Abstract〉

It is well known that the Japanese language possesses a large set of sentence-final particles which typically occur in conversations. They are signals of the speaker's various sentiments. Especially it is difficult for foreign students to use *yo*, for the hearer feels impoliteness on the expression of the speaker used *yo*. When the speaker uses *yo*, he/she has a sort of conviction on the information he/she conveys. So *yo* expresses an advantage of the speaker over the information. As a result, the speaker adds impoliteness to what he/she wants to say, putting *yo* at the end of a sentence. But there is a degree of the impoliteness *yo* shows. The degree depends on the person in the information. The second person used in the information, the degree is quite high. The first person used, it gets lower. And the third person used, it becomes the lowest.

キーワード：「よ」、有利性、「失礼さ」、主格、人称

1. はじめに

日本語の対話において、終助詞は頻繁に使用される。終助詞が持つ対人関係の機能は重要であろう。実際に終助詞を使わずに、日本語の対話を成立させるのは、かなり困難である。それだけ日本語にとっての終助詞が果たす役割が大きいといえる。しかし、日本語を学ぶ外国人学習者にとっては、その運用面において、難しく、注意を要する。終助詞をつけるか、つけないかによって、その発話に対する聞き手の印象が大きく影響を受けるためである。例えば、次のような対話をみてみよう。

教師：もうレポートは出しましたか。

学生1：ええ、出しました。

学生2：ええ、出しましたよ。

学生1、学生2とも「レポートを出した」という内容を伝えているのは同じであるが、教師が受ける印象は大きく異なる。学生2のように「よ」が付加された発話のほうに、「失

礼さ」を感じる。外国人学習者がこの違いを正確に認識し、更に使いこなすのは困難であろう。

これまでに、「よ」に関する研究は多くなされてきているが、待遇上の問題を扱ったものは少ないように思われる。本稿では、使い方によっては聞き手が発話内容に関し、「失礼さ」感じてしまう「よ」について、考察したい。まず「よ」の基本的意味機能を捉え直し、「よ」の持つ待遇上の問題を明らかにしていく。

2. 先行研究

「よ」に関する研究では、「ね」との対比からの考察が多く見られる。この場合、「話し手」の情報が「聞き手」と共有されるか、されないかという点から捉えるものが注目される。⁽¹⁾ 話し手の発話内容における情報に関して、話し手と聞き手が共有するものであれば「ね」、話し手のみが所有するのであれば「よ」が使われるとされている。この考えに基づいて、例えば、伊豆原（1994）は「よ」の機能に関して次のように述べている。

＜「よ」の付与された情報が聞き手の知らないこと、気づいていないことであることを示す標識＞⁽²⁾

このような説明は「よ」の単独用法には適切であるが、「よ」と「ね」が共起した場合には、矛盾が起こるのではないだろうか。話し手の発話内容が聞き手と共有し、かつ共有しない場合が同時に存在することになる。

この矛盾を指摘し、蓮沼（1995）は「よ」の機能を次のように捉えている。

＜「よ」は、認識上の何らかのギャップが存在する文脈で、認識能力の発動を促し、認識形成を誘導する標識である。＞⁽³⁾

そして、＜「認識上のギャップが存在する文脈」＞とは、

＜当該の事態に気づいていないとか、忘れていたといった理由で、話し手または聞き手の側に認識の欠落が生じている状況や、両者の間に情報の把握や発話意図の解釈などをめぐって、食い違いや誤解・無理解が生じているような状況＞⁽⁴⁾（下線は引用者）

としている。

このように考えることで、「よ」の機能はかなり説明ができる。

A：明日、田中は来るかな。

B 1：来るよ。

B 2：来るだろうよ。

B 1・B 2 共、Aの「田中が来るか来ないか」という点に関して欠落している部分、Bが持つ「来る」という情報に「よ」を付加することで、「補充」し、その「修復」

をしていると考えられる。

しかし、B2はイントネーションによっては、Bの発話に「田中は来てほしくないけれど、来る」という意味が加えられる。この点に関して、「話し手」または「聞き手」、あるいは「両者」における認識のギャップの存在というだけで説明できるだろうか。B2の場合の発話内容を考えてみる。

- ①「田中が来るか来ないか」という点に関して、AB間のギャップが存在するので、「よ」を付加することで、「補充」し、その「修復」をしている。これは前にみたように、「両者」における認識のギャップが明らかに存在する。
 - ②「田中が来る」という点では、AB間に認識のギャップがある。しかし、さらにB自身は「田中に来てほしくない」という希望がある。つまり、B自身の中で、「田中に来てほしくない」しかし「田中は来る」という希望と事実のギャップが存在する。
- ②のように、話し手自身の中で希望と事実の間にギャップがあるような場合、「話し手」と「聞き手」、あるいは「両者」という観点からのみで、考えられるだろうか。この②のような場合を考慮にいれ、次章では、まず、話し手の言表事態に対する態度の違いに注目して、「よ」の機能を捉え直してみたい。そして、最終的に「よ」の使用によって何故「失礼さ」を感じるのか、更にその「失礼さ」の度合いは常に一定なのかという2点について、明らかにしていきたい。

3. 「よ」の基本的意味機能

これまでの考え方では、「よ」が持つ待遇的側面の要因を捉えにくい。ここでは、改めて「よ」が持つ基本的意味機能について捉え直したい。

1) A: これ、どこで手に入れたの。

B: 会社の部下に貰ったんだよ。(『種』)

2) A: では、どなたですの。

B: 私はここの所長ですよ。(『自』)

1) 2) 共、疑問詞を含む疑問文に対する応答文に表れる「よ」である。疑問詞疑問文を受けるBは、その疑問詞に対する答えを既に知っていることになる。そして、その質問に対してBは応答文として「よ」の付加された文（以下「よ」文とする）を発している。この場合、BはAに比べれば、Bが発話する情報内容に関して、Bは有利な立場にあると思われる。1) の場合は、Aが「手に入れた場所」を知らずにBに質問をしている。そして、Bは知っている「確信のある情報」をAに提供している。2) の場合は、Bが自分の身分を答えている。これは、言うまでもなくB自身が持つ最も確実な情報であろう。

3) 北岡：そんなことするもんか！お前がやったんじゃないのか。

私：違いますよ。(『女』)

3) の場合は、疑問詞を含まない疑問文であるが、話し手である私は明らかに「自分じゃない」ことを知っていて、応答しているのである。

4) 照美：お母さん、僕、あの広美さんのこと気に入ったよ。理想の人だよ。

母：照美ちゃん！？今、何って言ったの…。(『コ』)

4) の場合は、この場面で、「照美」が「広美さんを気に入った」という事実を、「母」が初めて聞いたと考えられるであろう。

1) ～ 4) の場面での「よ」文は、話し手によって発話される時点において、聞き手が知らず、話し手が知っていると思っている内容を伝えている。明らかに話し手の情報に属するものであり、聞き手より話し手が有利な立場にあると考えて発話している。これは、「よ」が付加される最も典型的な例である。

5) 外国人：日本人は漢字を使いますね。(作例)

日本人：ええ、使いますよ。

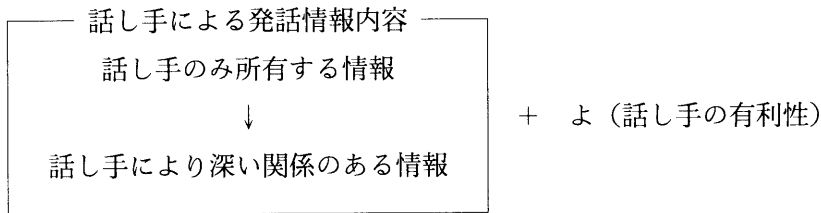
5) の場合、外国人は相手が日本人だと知った上での質問である。さらに、「日本人は漢字を使う」ということを知っている。1) ～ 4) で見た例の場合は、明らかに聞き手が知らないことを話し手が述べていたが、5) のように、聞き手も知っている内容にも「よ」文は使われている。しかし、5) の「よ」文にも、1) ～ 4) の「よ」文に共通するものがある。それは、「よ」文を発話する話し手は、聞き手より有利な立場にあるということである。確かに聞き手である外国人も「日本人は漢字を使う」ことを知っている。しかし、その確信性という観点からみて、日本人と比較すれば、話し手である日本人が立場上有利であると言えるだろう。

これらの場面における「よ」文は、話し手が有利な立場において、発話されているものである。

ここで、「よ」の基本的意味機能を次のように考えておきたい。

「よ」は話し手が有利性を持っていることを表す指標である

「話し手」の「有利性」とは、話し手が発話情報に対して、聞き手より確信性があると思っていることを示す。しかし、当然話し手の確信性には幅がある。つまり、「よ」文において伝えられる情報が、話し手のみ所有する情報から、聞き手にも所有されるが、話し手により深く関係した情報であるかという点である。図で表すと次のようになる。



では、話し手が自分に有利な発話内容を述べる場合には、「よ」の付加は必須条件なのだろうか。今までみた例から「よ」を取ってみる（以下、付加された「よ」を除いた部分を「 ϕ 」文とする）。

1)' A : これ、どこで手にいれたの。

B : 会社の部下に貰ったんだ。

2)' A : では、どなたですの。

B : 私はこの所長です。

3)' 北岡 : お前がやったんじゃないのか。

私 : 違います。

4)' 照美 : お母さん、僕、あの広美さんのこと気に入った。理想の人だ。

母 : 照美ちゃん！？今、何って言ったの…。

5)' 外国人 : 日本人は漢字を使いますね。

日本人 : ええ、使います。

「よ」文が使われた1)～5)と、「よ」を取った1)'～5)'を比較してみると、話し手の発話に関して、文脈上、聞き手より話し手の有利性が明らかな場合は、さほど意味において違いが出ない場合がある。「 ϕ 」文でも、話し手の発話内容が、話し手のみに属する情報、あるいは話し手により深い関係のある情報であることは対話がなされる場面上から明らかである。

つまり、話し手のみに属する情報、あるいは話し手により深い関係のある情報であるかという点は、「よ」が付加される必須条件ではないのである。ただし、白川も指摘しているように、話し手がこのような発話をする場合には、「よ」を付けなければしまりが悪い文^⑤ となろう。

話し手が、話し手のみに属する情報、あるいは話し手により深い関係のある情報を発話する場合には、「よ」を付けることが多いといえるだろう。しかし、それは必ず付けなければならないというものでもない。「よ」の機能はさらに次のようになる。

「よ」は話し手が有利性を持っていることを表す任意的指標である

基本的意味機能の「よ」が付加される情報内容は、話し手のみ所有するもの、あるいは話し手により深く関係するものであった。言い換えれば、例1)～4)の「よ」文では、その情報内容の主格(ガ格)は話し手自身である。1)～4)の例は、明らかに聞き手よりも話し手に深く関係のある情報内容に「よ」が付けられたものであった。また、5)「よ」文においては、「日本人」が話し手となっているが、これも日本人である話し手本人により深い関係がある。このように、話し手が聞き手よりも情報内容に関して有利な立場にいることが明らかな文脈で、さらに「よ」を付加すると、話し手が話し手自身が情報内容に関して有利な状況にあることを強調してしまう場合もある。ここに、聞き手が話し手に感じる「失礼さ」の要因があるように思われる。

しかし、5)の例からもわかるように、この情報内容の主格が常に話し手自身とは限らない。この情報内容の主格が話し手自身(1人称)であるのか、聞き手(2人称)、他のあるいは第三者であるのか、つまり話し手聞き手以外のもの(3人称)が主格となるのかによって、話し手が情報提供時に、情報内容に関して持つ確信度に差が生じると思われる。この点に注目することが、「よ」に表れる待遇上の「失礼さ」の度合いをみる手がかりになると考えた。「 ϕ 」文における主格と話し手の有利性を表す「よ」との組み合わせから、「よ」が付加されることによって感じる「失礼さ」の度合いをみていきたい。

4. 「 ϕ 」文における主格からの考察

話し手の「 ϕ 」文における話し手の確信性を左右するものに、話し手自身が関わっているもの、聞き手が関わっているもの、第三者が関わっているものがあるように思われる。そこで、「 ϕ 」文の主格を、話し手自身(1人称)、聞き手(2人称)、話し手聞き手以外のもの(3人称)のどれに相当するのかに注目した。3章で見たように、「よ」の基本的意味機能を「話し手が有利性を持っていることを表す任意的指標」と考えた。このような「よ」の機能と「 ϕ 」文における主格との関係から、「よ」文における「失礼さ」の度合いが生じる理由を明らかにしていきたい。

1. 「 ϕ 」文の主格が1人称の場合

これは3章の1)～4)で取り上げたように、「よ」が付加される最も典型的なものである。「よ」を「話し手が有利性を持っていることを表す任意的指標」と捉えたように、話し手自身が主格となる「 ϕ 」文に話し手が「よ」を付加することは、多く、また、自然である。しかし、1人称には、話し手自身の「私」と、話し手と聞き手、話し手と聞き手と第三者、話し手と第三者を表す「私たち」の4つのタイプがある。では、まず、主格が話し手本人のみの場合をみていく。

1-1. 主格が話し手のみの1人称

主格に話し手のみ含む1人称をとる例をみてみよう。1人称には、「俺」「僕」など「私」で代用できるものも含む。主格を 、主格省略の場合は（ ）で加えた。

6) 木谷君。ああ、ああ。(私が) 憶えていますよ。(『エ』)

7) こういう仕事っていうのは、あまりよくないって(私が) 言ってるんだよ。(『新』)

8) うん、おれがおごってあげるよ。(『新』)

6)～8)は、話し手と聞き手がいるという場面において、「 ϕ 」文における主格が話し手自身となる1人称である。話し手が自分自身の経験や態度について述べているのであるから、話し手のみに関係する情報、あるいは話し手により深く関係する情報であるのは確実である。「よ」を取り除いた「 ϕ 」文のまま発話しても、対話は成立する。しかし、3章でも少し触れたように、「よ」を付加した方が発話として落ち着く。そこには、「よ」が「話し手が有利性を持っていること表す指標である」という基本的機能が関係している。話し手が聞き手より自分に関係が深い情報を述べる場合、「よ」文として発話するのは自然であろう。

「よ」文の場合、聞き手が受ける「失礼さ」の度合いはどうなるのか。「 ϕ 」文における主格は、1人称＝話し手であり、聞き手は含まれていない。話し手は聞き手に対して明らかに有利性があるに対して、聞き手には話し手以上の有利性は認めにくい。このことから、「よ」が与える「失礼さ」の度合いは弱まる。

1-2. 主格が話し手と聞き手、話し手と聞き手と第三者、話し手と第三者の1人称

この場合の主格は、「私たち」で代用できるものである。例を見ていく。

9) 平気だよ。できるんだったら、早いうちに(私たちが) やろうよ。(『一』)

10) もう夜の9時だよ。(私たちが) みんなで帰ろうよ。(作例)

11) わたしたちだけでなく、大人たちは⁶⁾ みんな、そんな話は嘘じゃないと言って問題にはしませんでしたよ。(『エ』)

9)は、動詞の意向形で聞き手を勧誘する表現である。この場合も、話し手が「 ϕ 」文だけを発話しても、十分に聞き手を勧誘することはできる。しかし、「よ」を付けることで、「 ϕ 」文の情報内容に話し手が「早く行うのはいいことだ」「早く行うべきだ」と確信しているというニュアンスが加えられる。10)は、9)と同様、勧誘する表現であるが、「みんな」には話し手、聞き手、第三者が含まれる。「よ」を付けることで、「遅いから帰るべきだ」という話し手の確信が加えられる。11)では、「大人たち(私たち)」⁶⁾が「問題にしなかった」という事実を述べている。「大人たち(私たち)」には、聞き手は含まれていない。「よ」を付けることで、話し手はその事実に関しての確信性を加えている。

では、「よ」文に感じる「失礼さ」を考えてみる。「よ」は原則として「話し手が有利性を持っていること」を表す。この意味においては、もちろん何らかの「失礼さ」を聞き手に与えてしまう。「 ϕ 」文における1人称に、聞き手が含まれる場合、「話し手」の「有利性」を表す「よ」を付けることによって、聞き手は「失礼さ」を感じやすくなる。聞き手にも関係する情報を「 ϕ 」文が伝えるためである。その度合いは、「私たち」に聞き手が含まれる方が、含まない場合より強いであろう。しかし、この場合、1人称に話し手自身が含まれるため、聞き手が感じる「失礼さ」はそれほど強くはない。

1-3. 1人称主格の「失礼さ」の度合い

「 ϕ 」文の主格が1人称の場合、「よ」文における「失礼さ」の度合いは次のようになるであろう。

	「よ」文の「失礼さ」の度合い			
	強……………→弱			
1人称主格	聞き手を含む 私たち……………→私たち……………→私……………→私たち	聞き手と第三者を含む	話し手のみ	第三者を含む

話し手のみの1人称を中心に、話し手の目前に存在する聞き手を含めば、「失礼さ」は強まる。第三者を含めば、話し手聞き手両者にとっても「 ϕ 」文への確信は弱まるため、「よ」の「失礼さ」も弱まる。

2. 「 ϕ 」文の主格が2人称の場合

主格が2人称であるということは、聞き手が主格であることを意味する。「 ϕ 」文における情報は、実際には、聞き手により深く関係する情報である。そのように、本来は聞き手に有利性があるはずの情報を、話し手が「よ」文として発話する。2人称を主格とする情報内容に「よ」がつけられる場合、「 ϕ 」文は、1. 聞き手に関する情報を述べる文、2. 提案する文、3. 命令する文という3種類に大きく分類できる。なお、2人称が主格であるとは、聞き手を「あなたが」という主格で表せることを意味する。

2-1. 聞き手に関する情報を述べる文

次の例は聞き手に関する情報を「 ϕ 」文において述べているものである。

12) きっと(あなたが)緊張していたんですよ。とにかく恋をしてたんですから。(『錦』)

13) それは、きみが研究の鬼だからだよ。(『新』)

12) 13) では、話し手は「 ϕ 」文において、主格を聞き手である2人称にし、聞き手に関する情報について述べている。本来であれば、聞き手のみが所有するか、聞き手により深い関係のある情報のはずである。話し手はこの情報内容に関して有利ではないはずだ。

しかし、このような「 ϕ 」文に「よ」をつけることで、話し手の「有利さ」を聞き手に伝える。この場合の話し手が持つ有利さとは、12)であれば「恋をしていたから、緊張していたはずだ」、13)であれば「本当に研究ばかりしている」という、2人称である聞き手の言動や態度からの話し手の判断に対する話し手の確信である。

2-2. 提案する文

次に、「 ϕ 」文に提案する文が述べられる例をみる。

14) もっと(あなたが)説明すべきだったんだよ。(『一』)

15) あのね、フクロみたいなものは特に(あなたが)持たないほうがいいよ。(『新』)

14) 15) の「 ϕ 」文は、「～べき」「～ほうがいい」という形式で聞き手にある態度や行動を提案するものである。話し手が聞き手にある態度や行動を提案する背景には、聞き手が実際にしている態度や行動は、話し手が期待や希望しているものとは異なるという状況がある。聞き手自身が判断している、あるいは判断した態度や行動に対して、話し手は異論を持っているのである。このような「 ϕ 」文に「よ」を付け加えるわけだが、その「有利性」は、聞き手に対して話し手が持つ異論への確信であろう。2人称である聞き手の態度や行動よりも、話し手が聞き手にすべきであると思っていることのほうがよりよい、より正しいと確信していることを表す。

2-3. 命令する文

では、最後に「 ϕ 」文に命令する文が述べられるものをみていこう。

16) 君は自分のことばかり言っているけれど、少しはエディさんのことも(あなたが)思いやってやれよ。(『一』)

17) (あなたが)無茶言わないでくださいよ。(『一』)

18) 疑うんならもっと(あなたが)よく見てみろよ。(『新』)

16)～18) の「 ϕ 」文は、それぞれ、「～て(くれ、ください)」「～ないで(くれ、ください)」動詞の命令形で、聞き手にある態度や行動を要求するものである。2-2. と同様に、「 ϕ 」文の背景には、聞き手の態度や行動が、話し手の期待や希望しているものとは異なる状況がある。そして、話し手は話し手自身が期待、希望する態度や行動を、命令という形式で聞き手に伝えているのである。2-2. とは違い、命令という形式をとることで、話し手が持つ聞き手に対する異論は強いものである。このような「 ϕ 」文に「よ」をつけることで、話し手もっている異論への確信はより強くなる。

2-4. 2人称主格の「失礼さ」の度合い

「 ϕ 」文の主格が2人称の場合において、「よ」が持つ「失礼さ」の度合いをみる。まず、「 ϕ 」文の主格が2人称であることから、本来は話し手よりも、聞き手のみが所有す

る情報か、あるいは聞き手により深い関係のある情報である。そのような「 ϕ 」文に「よ」をつけることで、話し手は話し手自身の「有利性」を伝える。しかし、2人称は聞き手本人である。聞き手は話し手の目前にいる相手である。その相手である聞き手に向かって、話し手は聞き手に関する情報に、自分の「有利性」を「よ」によって伝える。この場合に、聞き手が感じる「失礼さ」の度合いはかなり強いものになる。

3. 「 ϕ 」文の主格が3人称の場合⁷⁾

主格が3人称の場合、最も「よ」文の用例が多く見られた。3人称が主格である場合には、「よ」を付加しやすいことになるだろう。

3人称の場合、主格としては大きく、1. 主格が人である場合、2. 主格が人以外である場合に大きく分けられる。

3-1. 主格が人である場合

まず、「 ϕ 」文における主格が人である場合をみていく。

19) これは想像ですが、娘さんはきっと今ほどの診断をお受けになって辛くて泣き出したのかもしれませんがよ。(『花』)

20) 今度の常務はものすごく管理好きなんだそうですよ。(『新』)

21) 男の子なんて愛想もなくそもない、べつにいまさら母さんと暮らさなくてもいいなんて(息子が)言うんですよ。(『錦』)

19)～21)の「 ϕ 」文は、3人称の人を主格にし、第三者に関する情報を述べている。3人称主格では、話し手聞き手双方にとって、直接自分自身のことではないため、「 ϕ 」文における確信は弱まる。「よ」を付け加えることで、その情報内容に対して、実際に見た、聞いた、感じたという話し手の確信を伝える。

3-2. 主格が人以外である場合

では、次に「 ϕ 」文の主格が人以外の3人称である例をみってみる。

22) この間の一万冊は、1日で売り切れましたよ。(『ブ』)

23) あの屋敷は組合が買い上げて、だいぶ前から倉庫になってるよ。(『エ』)

22) 23)の「 ϕ 」文は、人以外の3人称が主格である。そして、人以外であることを除けば、3-1. で記した内容が当てはまる。

3-3. 3人称主格の「失礼さ」の度合い

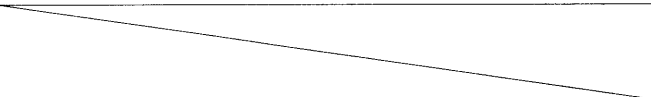
「 ϕ 」文における主格が3人称の場合は、3人称で表される人と人以外の物事にわかれる。しかし、これらは、話し手から聞き手への対話において、一般に3人称は話し手と聞き手話し手にとって、関わりが弱いものが多いため、両者が「 ϕ 」文に対して持つ確信性も弱くなる。

これまで示したように、「 ϕ 」文に、話し手の「有利性」を表す「よ」を付け加えれば、何らかの「失礼さ」が伝わるものの、話し手と聞き手共、3人称への関わりは確信性の面で遠いものとして感じられる。そのため、話し手の「よ」文から受ける「失礼さ」は弱められる。また、人を表す3人称主格のほうが、人以外を表す3人称主格よりも「失礼さ」がある程度強められるであろう。

5. 「よ」文における人称による「失礼さ」の度合い

以上、「よ」を「話し手が有利性持っていることを表す任意的指標」と考え、若干の考察を行ってきた。「よ」は「話し手が有利性を持っていること」を表すと考え、基本的に「失礼さ」を聞き手に伝えてしまうものとして扱い、「失礼さ」の度合いをみてきた。その結果、「失礼さ」の度合いは、言表事態の人称に影響されることがわかった。2人称、1人称、3人称の順で「失礼さ」の度合いは、弱まるといえるであろう。

では、考察結果を図でまとめてみる。

主格	「失礼さ」の度合い	同主格内の「失礼さ」の度合い 強→……………→弱
2人称 ↓	強 ↓	
1人称 ↓	↓	
3人称	弱	
		聞き手を含む 聞き手と第三者を含む 話し手のみ 第三者を含む 私たち → 私たち → 私 → 私たち 人を表す→……………→人以外を表す

6. おわりに

「よ」が持つ「失礼さ」の度合いについて考察してきた。今回、「 ϕ 」文における主格を1人称、2人称、3人称と大きく分けたことで、注(6)(7)でも触れたように、実際の文における主格人称が、心理的な面から捉えると異なる人称として考えられる場合もあり問題点が残った。人称をより詳しくみていくことで、今回提示した「失礼さ」の度合いは、さらに下位分類できるものと思われる。

また、2人称で触れた文形式との関係、さらにイントネーションについての考察が必要とされるであろう。今後の課題としていきたい。

注

- (1) 大曾 (1986)、益岡 (1991)、伊豆原 (1993ab、1994) など。
- (2) 伊豆原英子 (1994) 「終助詞『よ』の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから『よ』の使用条件を探る—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第2号 名古屋大学留学生センター pp. 47.
- (3) 蓮沼昭子 (1995) 「対話における確認行為『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」『複文の研究 (下)』くろしお出版 pp. 391.
- (4) 同(3)論文 pp. 391.
- (5) 白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77号 日本語教育学会 pp. 38.
- (6) 正確に言えば、主格は「大人たち」であり、3人称に分類すべきである。しかし、ここでは、「私たちだけでなく」という修飾があり、「大人たち」には「わたし」が含まれると考え、1人称に分類した。主格で表される人称とその人称が意味するものとのギャップが存在する例であり、より詳しく調べる必要がある。
- (7) 注(6)でも少し触れたが、3人称の分類もより詳しく調べる必要性がある。「私の父」といった家族、「私の本」といった所有物の場合も今回の分類では全て3人称に含んだ。

参考文献

- 伊豆原英子 (1993a) 「『ね』と『よ』再考—『ね』と『よ』のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80号 日本語教育学会
- (1993b) 「終助詞『よ』『よね』『ね』の総合的考察—『よね』のコミュニケーション機能の考察を軸に—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1号 名古屋大学留学生センター
- (1994) 「終助詞『よ』の使用と使用制約—情報と待遇性の関わりから『よ』の使用条件を探る—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』2号 名古屋大学留学生センター
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析1『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」『日本語学』5巻9号
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—』大修館書店
- 楠本徹也 (1995) 「終助詞『よ』の待遇性に関する一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第21号 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 白川博之 (1992) 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77号 日本語教育学会
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6巻10号
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形『よね』の用法と機能」『対照研究第二号：発話マーカーについて』筑波大学つくば言語フォーラム
- (1995) 「対話における確認行為—『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」『複文の研究 (下)』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版

用例採取資料：石井俊彦（1995）『種』（＝『種』）講談社、長崎強（1995）『自然の肉』（＝『自』）講談社、仲川友康（1995）『コンピューターお見合い』（＝『コ』）講談社、赤川次郎（1984）『女社長に乾杯！』（＝『女』）新潮社、筒井康隆（1977）『エディプスの恋人』（＝『エ』）新潮社、沢木耕太郎（1981）『一瞬の夏』（＝『一』）新潮社、椎名誠（1991）『新橋烏森口青春編』（＝『新』）新潮社、渡辺淳一（1970）『花埋み』（＝『花』）新潮社、井上ひさし（1970）『ブンとフン』（＝『フ』）新潮社、宮本輝（1985）『錦繡』（＝『錦』）新潮社

付記

本稿に関して、三重大学教育学部丹保健一教授には、貴重なご意見・ご指摘をいただき、また、用例採集にもご尽力いただいた。そして、丹保教授ゼミ学生の卒業論文・修士論文からも多くのヒントを得た。厚くお礼申し上げます。